

“Empathy” and Japanese “kyokan” in the Multicultural Symbiotic Societies : Are these conceptions really important?

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永島, 聡, NAGASHIMA, Satoru メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20608/00001105

報告

多文化共生社会における“empathy”と「共感」 — 両概念は本当に重要なのか —

永島 聡¹⁾

“Empathy” and Japanese “*kyokan*” in the Multicultural Symbiotic Societies — Are these conceptions really important? —

Satoru NAGASHIMA¹⁾

要旨

多文化共生社会の中での異文化交流を考える場合、英語圏においては empathy が大切なものとされている。これから多文化化していく日本においてもまた、今後共感が尊重されるのかもしれない。一方英語圏において empathy はそれほど支援的ではないという研究があり、またそもそも empathy と共感とは実はかなり異なる概念であることがわかった。よって多文化共生において empathy や共感を単純に善きものと信じることにはリスクがあると言える、ということが確認できた。

キーワード：共感、empathy、シンパシー、多文化共生、アイデンティティ

Abstract

Empathy is considered important in English-speaking countries when considering cross-cultural exchanges in multicultural symbiotic societies. In Japan, which is becoming more and more multicultural, *kyokan* (“empathy” in Japanese) may be respected in the future. On the other hand, there is research that shows that empathy is not so supportive in English-speaking countries, and it was found that empathy and *kyokan* are actually quite different concepts. Therefore, it was confirmed that there is a risk in believing that empathy and *kyokan* are simply good in multicultural symbiosis.

Key words: *kyokan* (“empathy” in Japanese), empathy, sympathy, multicultural symbiosis, identity

1) 保健科学部看護学科

はじめに

心理的に困難を抱えている人を「共感」しようとする人は、きっと少なくないであろう。この共感という言葉は心理療法においては、C.R.Rogersの“empathy”をそのように訳して我が国に取り入れたものであると言えよう。ただしRogersの理論が積極的に翻訳されるようになった1960年代当初、この用語は「感情移入」と訳されることが多かった。empathy およびその日本語訳としての共感という概念は、心理支援にとって最重要の基本的姿勢であることは言わずもがなの大前提である。さらに心理支援場面のみならず、日常生活において人間が取るべき道徳的姿勢としても、重視すべきものとして、多くの人々に見なされていると言ってよいであろう。

そのempathyを作ったイギリスやアメリカなどの英語圏の国は、古くから多文化共生社会である。そこでの円滑な人間関係の構築のためには、empathyが大切になってくる、という考え方があつた。これを鍵概念として現代の多文化共生問題に対処しようとしているのである。

そして我が国においても、イギリスやアメリカに後れを取りつつも今後急速に多文化共生社会が広がっていくのであろう。この過程の中で、共感が単なる心理療法学用語だけでなく、また一般社会における道徳的言葉としてだけでなく、多文化共生にとっても注目されてくる可能性はある。

普段日本語圏に属する日本語ネイティブは共感という概念について、特に疑問を持たずに使ってきたのであろう。心理的に何かしらのトラブルを抱えている誰かの心を支える際には共感しようとするし、その人の心理的問題が和らいだとき、支えた人は支えられた人を共感できたと思っている。これはきっと英語圏に属する人々にとっても同じなのだろう、とも思っている、と言うよりはむしろ、特に意識しなければ疑問にも思っていない。しかしながら、このempathyと共感、はたして同じ

なのだろうか。

そもそも共感とは何なのか。疑問を感じずにただ漫然と支援したつもりになることが、最も避けられなければならないことなのだろう。拙論においては、多文化共生社会を本格的に迎つつある我が国にとって、empathy およびそれを輸入したものとしての共感とは何なのか、あらためて比較検討し、日本語ネイティブにとっての共感とは何なのか、多文化共生にとってこれらの概念は本当に大切なものなのだろうか、ということ等について考察してゆきたい。

empathyとは？共感とは？

empathyとは何か。Rogersは以下のように言う¹⁾。すなわち「建設的なパーソナリティ変化(constructive personality change)」のための条件の一つとして「セラピストがクライアント自身の経験の気づき(awareness)についてセラピストが正確で共感的な理解(empathic understanding)を経験しているということ」がある、ということである。そして「クライアントのプライベートな世界をあたかも自分自身のものであるかのように感じるが、『あたかも…のように(as if)』という性質を失わない---これが共感(empathy)であり、これはセラピーにとって本質的なものであるように思える」とも述べている。さらに、クライアントの世界がセラピストにとって明らかなものとなり、セラピストがそのクライアントの世界の中を自由に歩き回る(moves about in it freely)時、「セラピストはクライアントが明確に知っていることについてのセラピストの理解をクライアントに伝えることができるし、さらにクライアントがほとんど気づいていないクライアントの経験の意味を言葉にすることもできる」とも言う。

このRogersの考えはカウンセリングや心理療法のみならず、例えば教師-生徒関係、看護師-患者関係、親子関係、友人関係等々、他の人間関係内の

心理的支援一般にも当てはまるものと考えられている。支援者が被支援者の立場に身を置き、被支援者が意識している気持ちをありのままに、あたかも支援者自身の気持ちのように感じる。しかしその気持ちはあくまでも被支援者のものであるから、その「あたかも」は忘れない。そして経験豊富なカウンセラー等支援者は、被支援者の内的世界で起きている様々な可能性に十分思い巡らせ、被支援者が意識しているものだけでなく、まだ無意識的なもの、これから気づくかもしれないものをも感じ、それを被支援者に伝え共有することもできる、と行うことができる。被支援者が意識できている内容の把握が empathic understanding であり、意識内容に加え無意識内容も把握している場合が empathy であると判断することもできそうであるが、これらが Rogers によって明確に区別されているわけではない。心理専門職による empathy とそうでない支援者によるそれには、連続性があると考えられる。さらに個人的心理支援を超えて、例えば経済的困窮や圧政など何らかの心理的困難を抱えている人々の集団に対しても、ある人々はその立場に身を置き共感することがある。本稿における empathy は上述のようなものとして論を進める。

では共感とは何か。支援者が被支援者の立場に身を置いて、あくまでも被支援者の価値観で、被支援者が感じている気持ちをできるだけそのままに、支援者が感じる。専門家が行う心理療法の場合、カウンセラーはクライアントがまだ無意識的に抱えている何らかの感情までも把握し、それをクライアントに伝え両者が共有する、ということもあるだろう。心理支援の学派は様々であり、学派の数だけ、あるいは学派の数以上に、支援の技法が存在する。その種々の異なる技法に通底する治療的態度として、共感肯定的なものとして存在すると言える。また一般の人々がその人間関係の中で、誰かを支えるために共感する、すなわち相手の立場に身を置いて相手の感情を感じようとするのであるが、その場合の共感も専門的心理支援におけるそれと同様

のものとして見なされ、またその行為は人間にとって肯定的なものとして捉えられている。さらに個人的な人間関係の外において、広く社会一般の中で見つけられるつらい思いをしているであろう知らない人々に対しても、我々は共感の念を抱くことがある。そしてこれら種々の共感はいかに連続的なものであるだろう。本稿における共感はこのようなものとして論を進める。

英語圏における empathy の歴史

ところでアメリカ人やイギリス人等英語ネイティブにとって、empathy という言葉はそれほど古いものではない。1909年にイギリス・アメリカの心理学者 Edward Titchener がドイツ語の Einfühlung を翻訳する際に、empathy という言葉を造語したのがその歴史の始まりとされている²⁾。Ein は into/in であり、Fühlung は feeling である。en はギリシャ語における in であり、pathy は feeling や emotion や suffering 等のギリシャ語 pathos から来る。empathy が英語圏に出現するまでは、sympathy がその役割を担っていたようである。イギリスの哲学者・経済学者 Adam Smith 等も sympathy を現在の empathy の意味で用いていた³⁾。

ドイツの哲学者 Theodor Lipps は、Einfühlung を19世紀ドイツ美学の概念から社会科学および人間科学の哲学へと変容させたのであるが、Titchener はそれを英語圏に取り入れたとされる⁴⁾。元々美学的な「感情移入」として使われることが多かった Einfühlung であり empathy であるが、現在は他者の立場に身を置いて他者を理解する、という心理学的意味で使われることが定着してきたのである。

その後英語の文献の中で empathy の使用頻度が上がったのは1940年代とのことである。さらに使用頻度について例えば“willpower”を抜いたのは1961年、“self-control”を抜いたのは1980年代半

ばということである⁵⁾。

ところで、sympathy の歴史は英語圏にとってより古い⁶⁾。これは16世紀後半に中世フランス語よりもたらされた。そして「感情の適合」という意味で使われたのが16世紀末で、17世紀になる頃には「仲間の感情」「思いやり」という意味で用いられるようになる。そしてその後18世紀にAdam Smithが現在のempathyの意味で『道徳感情論』などで使うようになった。中世フランス語以前は後期ラテン語、ギリシャ語と遡ることができる。“syn”は英語の“together”に相当するギリシャ語である。現在英語圏ではempathyとsympathyとは明確に区別され、英語初学者に対してはこれらの違いを強調する教育をしているという。

sympathyは他者の立場に立って他者の気持ちをそのままに感じる必要はない。あくまでもintoではなく、togetherなのである。Bloomによれば、sympathyは他者の感情に対する自分の反応を意味し、その直接的反映ではないと言う⁷⁾。例えば目の前の人が失恋をして悲しんでいるとき、それを見て可哀想に思うのがsympathyであり、自分もその人と同様の悲しみを感じるのがempathyである。そしてsympathyは通常否定的な感情である。幸せな人が幸せな人をsympathizeするというのではないのである。またCambridge Dictionaryによると、sympathyは「誰かの問題を理解しケアする感情」⁸⁾となっている一方、empathyは「他者がどのように感じているかを想像する能力」⁹⁾と記されている。やはりここでもsympathyは否定的感情である。否定的な感情を抱いている人を見ている人が、自分自身のもので「可哀想だ」とか「お気の毒に」というように抱く感情のことであると言える。それに対してempathyは、他者の立場に立ってその感情を思い巡らせ理解する「能力(ability)」である。sympathyは単に抱く感情であるが、empathyはより主体的かつ積極的に相手の中に入っていこうとする行為でありその能力であると言える。

相手の中に主体的積極的に入っていく行為ない

し能力ということに関しては、英語に「他人の靴を履く“put oneself into someone's shoes”という慣用表現がある。これはまさに英語ネイティブにとってempathyであるという。相手の靴を履く、すなわち相手の立場に身を置いて考えてみよう、ということである。

最近の英語ネイティブにとってのempathy

昨今英語圏では特にempathyについて、心理臨床学的のみならず、より社会一般のための道徳的概念として用いられることが多いと言える。例えばイギリスの初等中等教育において、empathyは重要概念になっている。イギリス在住の作家ブレイディみかこによると、多文化共生の歴史の長いイギリスにおいて、empathyの教育が強調されている¹⁰⁾。例えば中学校において“citizenship education”というカリキュラムが設定されている。民主主義社会を主体的に生きる市民を養成するための授業である。イギリス国内には移民とネイティブ、移民同士、ブレグジット賛成派と反対派、階級の上下、宗教の相違、高齢者と若年層、富裕層と貧困層等々、様々な対立や分断がある。このような状況下で自分の価値観を押しつけてばかりでは何も生まれない。これらを克服するためには、互いの立場に立って理解し尊重し合うことが不可欠である、という思想がそこにある。このためには、子どもたちが主体的にempathyを理解する必要があるのである。

アメリカではどうか。ここで第44代アメリカ大統領Barack Obamaが就任前の2006年にNorthwestern大学の卒業式で行ったスピーチを考えてみる¹¹⁾。例えば次のような箇所がある。「この国では連邦政府の赤字という不足についてはたくさん語られている。しかしながら私が考えるのは、我々はempathyの不足についてより多く語るべきである、ということである。すなわち我々が誰か他の人の靴を履いてみる能力である。我々とは違う人々を通して世間を見る能力である。飢えた子

ども、レイオフにあった鉄鋼労働者、寮の部屋を掃除してくれる移民の女性を通して見るのである」 「あなたたちが人生を送っていくにつれ、empathyの良さを培っていくのはより難しくなっていくでしょう。より簡単にはなりません。実社会では社会奉仕が要求されることはありません。あなたたちにケアすることを強制する人は誰もいないのです」。恵まれた階層が多いであろう卒業生たちは、その恵まれた者としての狭い価値観の中だけで人生を送っていくべきではない。過去において empathy は十分に語られることはなかったが、今後はますます異なる状況にいる人々の靴を履かなければならなくなってくる、ということである。イギリスと同様またはそれ以上に多文化共生でなければならぬアメリカにとって、empathy は社会道徳的に重視されてきているのであろう。

日本語ネイティブにとっての共感の歴史と その危険性

英語圏にとって、少なくとも多文化共生においては empathy が基本理念になってきていると言えるのであろう。

先にも述べたが、心理臨床学においては1960年代に empathy の訳語として当初「感情移入」が用いられた。この感情移入であるが、モノや芸術作品に感情移入する、といった美学的なニュアンスが強いのであろう。その後共感が使われるようになる。

empathy の輸入以前はどうであったのか。例えば「身になる」という表現はそれ以前から存在し、現在も使われているだろう。例えば「人の身になって考えろ」である。古くは平安中期の後撰和歌集にある「花すすき穂に出でやすき草なればみにならむとは頼まれなくに（詠み人知らず）」という歌にも出てくる概念である¹²⁾。あるいは「かたはらいたし」である。現代においては「笑止千万」的な意味で使われることが多いが、もともとは「『傍ら』で見えて、苦しさやつらさを感じる」という意味があっ

た。源氏物語に遡れば「このごろの御気色を見奉る上人女房などは、かたはらいたしと聞きけり」という箇所がある¹³⁾。いずれも共感に近いものであると思われる。しかしまだ詳細に検討する必要はあるだろう。

いずれにせよ英語圏と同様、日本語圏においても共感という概念はカウンセリングのみならず、一般社会でも道徳的なものとして使われる。我が国においても今後、異なる宗教や異なる歴史等をそれぞれ背景に持つ様々な民族が暮らすようになってくる。そして2019年4月、新たな在留資格である「特定技能」が新設された改正出入国管理法が施行された。多文化共生はますます身近なものになるのだろう。

このような状況下、我が国においても、英語圏の empathy と同様に共感が多民族の相互理解にとって重要であると認識されてくるのであろうか。

ところで芥川賞作家である金原ひとみは HUFFPOST でのインタビューで、移住先のパリでの経験等を踏まえ、共感に関して以下のようなことを述べている¹⁴⁾。フランスでは多くの人がマイノリティーであり、彼女も最初は言葉も通じず手続きも進まず、周囲の人々が何を考えているのかわからずイライラしていたのだが、ある時スイッチが切れて開き直り、「心の中が無風になった」と言う。過剰に気持ちを読み合ったり共感を求めたりする我が国ではなく、隣人や電車で乗り合わせた人が何を考えているのか全くわからないフランスという土地に、彼女はとても開放感を感じたのである。日本も今後多様化の時代に向かうのだろうが、そこで必要なのは共感のスイッチを切る能力かもしれない、と金原は考える。わからないものはわからないでよいし、共感する必要はない、ということである。自分と違う人を許容する力がなければ、新しい発見もないのである。そして、他人に共感を求める人はこれからの社会で生きづらくなるだろうし、自分はいこうであると言えないと、人の言葉に影響を受け続け、飲み込まれてしまうとも言う。金原は共感はい

らないと断言するのである。

日本語ネイティブにとって、共感がネガティブなものとして機能する可能性もあると考えるべきなのであろう。そもそも英語ネイティブの中にも、共感を決して良いものではないという見解は昨今少なくない。Bloomにとって共感 は 支援者側を疲弊させるものである。特に相手の感情をありのまま感じて互いに揺り動く「情動的共感 (emotional empathy)」は、被支援者の情緒に巻き込まれてしまいやすく、危険であると言う。一方、相手の感情の内容を知識として理解する「認知的共感 (cognitive empathy)」は、情緒的に巻き込まれるリスクは少なく、冷静に被支援者の内的世界を理解できるのでより望ましいとのことである¹⁵⁾。

被支援者側にとってはどうか。Bloomはいくつかの事例から、そもそも被支援者は情動的共感を求めていると言う。ある事例では、情動的に揺れている支援者より、冷静かつ客観的に傾聴し認知的に共感され、さらに共感とは無関係すなわち相手の立場に立たないあり方としての「思いやり (compassion)」「気配り (care)」「暖かさ (warmth)」といった距離感のある行為を受ける方が、よりポジティブに評価されている¹⁶⁾。

加えてPinkerは共感の問題点の一つとして以下のように述べている。たとえミラーニューロンがあったとしても、それがいつも無条件反射的に活性化するわけではない。相手との関係性をどう解釈しているかにより、共感のスイッチは入れられもするし切られもする。相手に可愛さ、見かけの良さ、親戚や友人関係、類似性や共通認識等が感じられれば、共感しやすくなり、ミラーニューロンも活性化しやすくなる。それらのバイアスなしに共感できると信じることは「いかにも20世紀的な最悪の夢想」とまで言い切っている¹⁷⁾。

多文化共生の中で異文化交流をしようとする場合、まずは相手を共感して、と思うのは不自然ではないと思う。しかしながらBloomやPinkerの考えに従えば、見知らぬ異文化の人々の立場に身を置い

て共感しようとするのがそもそも望ましくないのである。特に情動的に共感しようとしても疲弊するだけである。そして自分が共感するように見知らぬ他者から共感されたいと思っても、見知らぬ同士なのであるから、例えば自分の見た目が可哀想な可愛い小さい子どものようでない限り、それもほぼ不可能な話なのである。最初から共感し合えないことを大前提に、相手を何を考えているのかわからない未知の存在のまま認めることで、よりストレスの少ない交流が可能となり、異文化交流も進む可能性がある、ということである。

empathyと共感の相違

そもそもempathyと共感を疑問なく同じものとしていてよいのであろうか。

英語ネイティブが他者をempathizeするとき、どのような声かけをするか。例えばNational Aphasia Associationが次のような用法を示している¹⁸⁾。“I understand that aphasia is frustrating, especially not being able to easily communicate.”。これがsympathizeになると“I am so sad that you’re experiencing aphasia.”である。さらにcompassionを示す場合“I want to help you navigate aphasia.”となる。empathyでは「私はあなたが〇〇〇で困難を感じているのを理解している」という声かけになり、sympathyでは「あなたが〇〇〇なのが私にはつらい」であり、compassionでは「私はあなたが〇〇〇なのを助けたい」となるのである。empathyは相手の立場に身を置いてその相手の感情を適切に理解していることを伝えようとしている、sympathyは特に相手の立場には立たず、つらい思いをしているあなたを見て私もつらい、ということである。compassionも相手の立場には特に立たずに、私の側のシンプルな思いやりを表現しようとしている。いずれにせよ、少なくとも意識レベルにおいては、あくまでも“I”が“you”に対して何かを感じているのである。相手の立場の

中に入っていくその主体は“I”であり、入られ身を置かれるのは“you”であり、この区分は消えることはない。これらは他の声かけ場面においても同様に言えることであろう。もし一見“I”や“you”が使われない表現であったとしても、たいていの場合括弧付きで、例えば (to me) や (for you) のように隠れて存在していると考えて良い。

いずれにせよ、困難を抱えている人を empathize するときも sympathize するときも、さらには compassion を抱くときも、英語ネイティブにとって最初に意識に浮かんでくるのは“I”なのである。愛する人に告白するときでさえ、まずは“I”である。大切なはずの“you”が意識されるのは最後になってしまう。ここに、E.H.Eriksonの言うアイデンティティの確立の強さが見て取れる。Eriksonは人間が一つの人格的なアイデンティティを持っているという意識的な感情は、同時になされる二つの観察に基づくものであると述べている。それらは、時間軸の中で自分は不変 (selfsameness) であり連続性 (continuity) を持つ存在であることを直接的に知覚することと、このような自分はいつでも同じであり連続してずっと自分であるということを知覚することである¹⁹⁾。英語ネイティブにとって確実に“I”はいつでもどこでも変わらず連続して“I”である。それは“you”が認めてくれている。そして、他者の立場に身を置こうがどこにしようが、何か他の特別な要因さえなければ、このアイデンティティは拡散することはないのであろう。

同様のシーンで日本語ネイティブはどのように声かけするだろうか。まず主語である“I”に相当する「私」はめったに登場しないだろう。目的語である「あなた」もまずない。あるのはしみじみとした「しんどいね…」「つらいね…」といった述語だけの場合が大半であろう。ここで日本語ネイティブにとっての sympathy に相当するものを考えてみる。相手の立場に立たず自分自身の感情を感じることを「シンパシー」と呼んでみる。すると、共感

の場面とシンパシーの場面とで区別がつきにくくなっていく。相手の感情なのか自分の感情なのか、どちらなのかよくわからなくなってくるのである。とにかくしんどいしつらいのである。共感しているのか。シンパシーしているのか。日本語的には英語におけるほど明確に区分することができないのではない。「私」も「あなた」も使わないのだから、相手の立場に身を置こうが置くまいが“I”と“you”の分断が残る英語と違って、もうどちら側の感情かもよくわからない。「しんどい」とか「つらい」といったいわば「場」を両者がしみじみと共有している、とも言えるのかもしれない。ここに支援者が被支援者の感情に巻き込まれやすく疲弊しやすいもともとの状況があるとも考えられる。

sympathy の辞書的な訳は「同情」「思いやり」「共感」等々と様々である²⁰⁾。「共感」もあるのである。日本語の辞書においてシンパシーと共感の概念は英語ほど明確に区別されていないのが現状である。これを踏まえつつ、「私」も「あなた」もなく「場」を共有するということを鑑みると、やはり日本語ネイティブにとってシンパシーと共感とは明確に区別しにくくなる。であるのであれば、そもそも empathy と共感とは似て非なるものなのかもしれない。

日本語には“I”も“you”もないと先に述べたが、それらに相当する単語がないわけではない。“I”に対しては、私、あたし、わたくし、俺、僕、自分、おいら、わし、こっち、こちら、うち等々。最近の女子学生は「私」を用いずに自分の名前を使う者も多い。“you”に対しては、あなた、君、おまえ、あんた、そっち、そちら、自分等々。この「自分」であるが、関西独特の表現であると言える。相手の立場に身を置いて相手の言葉を使って相手に呼びかけているのである。さらに、例えば小さな男の子が迷子になっているのを見つけて呼びかけるとき、本来は「私」に相当する「ぼく」を使ったりもする。「ぼくどうしたの？」である。これは関西弁における「自分」の背景と共通するだろう。

上記以外にもその気になればさらなる列挙が可能である。日本語ネイティブは種々の場面に対して自分を変容させて合わせていく性質を持っていると言えるのではないか。さらに他者についての捉え方も、それぞれの場面に合わせつつ変容させている。ここにも、英語のような“I”と“you”の断絶はなく、今ここでの「場」に気遣い「場」の空気を共有しようとしている性質が表れているのではないだろうか。

Erikson のアイデンティティの観点から考えるとどうか。基本的に「私」も「あなた」も使わない。使うとしても場面ごとに変遷していく。例えば職場では「わたくし」であり、今の自分の家庭では「おれ」であり、実家では「ぼく」であり、友人といるときは「オレ」であったりする。それでも外で古い友人に共感的に接する際に「オレはオマエがつらいのを感じているんだぜ」とわざわざ言わない。「つらいよな…」だけであろう。日本語ネイティブにとって Erikson の言うところの、いつでもどこでも変わらず連続して同じ“I”であると自他共に認め合う状況は成立しようがない。だから英語ネイティブが他人の靴を履きながらも主客の分裂を維持するような empathy 的状况は生まれようがない。

このように考えてくると、もし例えば英語ネイティブと日本語ネイティブが異文化交流する場合、empathy あるいは共感の重要性をナイーブに信じた場合、円滑な交流は生まれにくいのではないだろうか。それぞれ empathy あるいは共感し合ったつもりになっているのであるが、そこでの内的経験はまるで違う。英語ネイティブは相手の立場に身を置く能力を発揮して相手に乗り移るように相手の靴を履くのであるが、あくまでも“I”は“I”であり“you”は“you”である。日本語ネイティブはそもそも共感とシンパシーの区別をせず、場の感情を共有しようとする。このギャップに気づいたときのフラストレーションやストレスは小さくない。素朴な共感信仰は危険なのであろう。

おわりに

多文化共生の中での異文化交流を考える場合、当然のように英語圏においては empathy が重視されている。今後ともますます多文化化していく我が国においてもまた、共感が尊重され得るだろう。しかしながら、英語圏において empathy がそれほど支援的ではないという考え方があり、そもそも empathy と共感とはかなり異なる概念であることも確認できた。よって多文化共生において、いまだ歴史の浅い empathy や共感をナイーブに重要視すべきものと信じることはリスクであるということがわかった。

ではこれら empathy と共感はそこまで異なるものなのであろうか。例えば V.E.Frankl は「自己超越」について次のように言う。「『自己超越』という言葉で私が理解しているのは、人間存在は自己自身を超えて、自己自身ではない何か—何かあるものや誰かある人、すなわち充足されるべき意味や自己が出会う人間存在—に自己を指し向けるという根本的事実である」²¹⁾。このような Frankl の概念から、empathy と共感に通底するものを検討できないだろうか。その論究は今後の課題としたい。加えて、日本語における「共感」という概念の歴史的背景に関する考究もより深めなければならないと考えている。

文献

- 1) Rogers, Carl R. The Necessary and Sufficient Conditions of Therapeutic Personality Change. The Journal of Consulting Psychology. 1957, Vol.21, pp.95-103.
- 2) Center for the Study of Language and Information (CSLI), Stanford University. “empathy”. Stanford Encyclopedia of Philosophy. CSLI, (2019年9月11日).
- 3) Bloom, Paul. Against Empathy: The Case

- for Rational Compassion. The Bodley Head, London, 2016, pp.16-17.
- 4) Center for the Study of Language and Information (CSLI), Stanford University. “empathy” . Stanford Encyclopedia of Philosophy. CSLI, (2019年9月11日).
 - 5) Pinker,Steven. The Better Angels of Our Nature: Why Violence Has Declined. Penguin Books, New York, 2012, p.573.
 - 6) Online Etymology Dictionary. “sympathy” . Online Etymology Dictionary. etymoonline.com, (2019年9月11日).
 - 7) Bloom,Paul. Against Empathy: The Case for Rational Compassion. The Bodley Head, London, 2016, p.40.
 - 8) Cambridge Dictionary. “sympathy” . Cambridge Dictionary. Cambridge University Press, (2019年9月11日).
 - 9) Cambridge Dictionary. “empathy” . Cambridge Dictionary. Cambridge University Press, (2019年9月11日).
 - 10) ブレイディみかこ . ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー . 新潮社 . 2019, pp.71-85.
 - 11) Northwestern University. “OBAMA TO GRADUATES: CULTIVATE EMPATHY” . Northwestern University. northwestern.edu, (2019年9月11日).
 - 12) goo 辞書 . “身になる” . goo 辞書 . goo, (2019年9月11日).
 - 13) weblio 古語辞典 . “かたはらいたし” . weblio 古語辞典 . weblio, (2019年9月11日).
 - 14) Huffingtonpost. “フランス生活を終えた金原ひとみ「日本人に必要なのは“共感のスイッチを切る”能力」” . HUFFPOST. huffingtonpost.jp, (2019年9月11日).
 - 15) Bloom,Paul. Against Empathy: The Case for Rational Compassion. The Bodley Head, London, 2016, pp.15-56.
 - 16) Ibid., pp.145-146.
 - 17) Pinker,Steven. The Better Angels of Our Nature: Why Violence Has Declined. Penguin Books, New York, 2012, p.591.
 - 18) National Aphasia Association. “Empathy, Sympathy, and Aphasia” . National Aphasia Association. aphasia.org, (2019年9月11日).
 - 19) Erikson,Erik H. Identity and the Life Cycle. W.W.Norton & Company, New York・London, 1979, p.22.
 - 20) goo 辞書 . “sympathy” . goo 辞書 . goo, (2019年9月11日).
 - 21) Frankl,Viktor E. Der Wille zum Sinn. Piper, München Zürich, 1991, S.16.